

『思いがけない贈り物』(1997年)

エヴァ・ヘラー／作 ミヒャエル・ゾーヴァ／絵
平野 卿子／訳 講談社



クリスマスイブの夜、サンタクロースの手もとに人形がひとつ残っていました。誰の分のプレゼントかわかりません。クリスマスに人形をもらわなかった子は、女の子6人男の子234, 867人。責任感の強いサンタクロースは、ひとりずつ訪ねることにしました。女の子から順に会いに行きますが、持ち主になる子がみつかりません。困ったサンタクロースは色々な人に相談します。

綺麗な挿絵もあり、大人も子どもも楽しめる物語です

『クリスマス・キャロル』(2006年)

ディケンズ／著 池 央耿／訳 光文社



スクルージーは守銭奴で、なおかつ欲深い因業爺である。そんなスクルージーはクリスマス・イヴの当日、かつて共同経営者だった亡きマーリーの亡霊と対面する。亡霊はスクルージーに忠告するためにやってきたのだった。道を誤った生涯は償うことができないということ、それから、三人の幽霊たちがこれからスクルージーに会いに来るということを伝えたとマーリーは去った。予言通りに三人の幽霊たちに会ったスクルージーは自分の過去・現在・未来の姿を知ることになる。

『クリスマスを探偵と』(2017年)

伊坂 幸太郎／文 マヌーレ・フィオール／絵
河出書房新社



クリスマスイブの夜、カールはある男を尾行していた。浮気調査だ。たつぷりと肉をつけた男が女の家に入っていくのを見届けてから近くの公園で時間をつぶすことにした。ベンチに座っている男に話しかけると最初はあまり良い反応ではなかったが、だんだん話が弾んでやがてカールの幼少期のクリスマスの話になる。「こじつけ、というのは嫌いですか？」その男は身勝手に頑固なカールの父親をもしかしたら本物のサンタクロースかもしれないという。

『羊男のクリスマス』(1989年)

村上 春樹／著 佐々木 マキ／絵
講談社



羊男は羊男協会からクリスマスのための音楽の作曲を依頼されました。ところがピアノの音をうるさがる家主の奥さんに邪魔をされて、ちっとも作曲が進みません。困り果てた羊男は、羊博士なる人物に出会います。この博士が言うことには、羊男が作曲できないのは、呪いのせいだということです。そこで羊男は、作曲の前に、呪いを解く儀式を行わなければならないことになりました。聖なる夜に贈る、村上春樹版「不思議の国のアリス」をお楽しみください。

『世界で一番のおくりもの』(2005年)

マイケル・モパーゴ／作 佐藤 見果夢／訳
マイケル・フォアマン／画 評論社

ブリッドポートのがらくた屋でずっと欲しかった机を買ったぼく。まきあげ式のふたはこわれ、脚部分には修理跡があり、横っちょは焼けこげていた。自分で元に戻せるような気がして修理をはじめると、どうしてもひとつだけ引き出しが開かない。力づくで開けると中から黒くて小さなブリキの箱がでてきた。箱の中に入っていたのは、1914年12月26日、戦場の最前線でクリスマスを迎えたあるイギリス兵士からの手紙だった。



『憑かれたポットカバー』

クリスマスのための気落ちした気色悪い気晴らし』

(2015年)

エドワード・ゴリー／著 柴田 元幸／訳
河出書房新社



〈ロウアー・スピゴットの世捨て人〉エドモンド・グラブルは、クリスマスイブに一人でお茶の準備をします。すると、ポットカバーの下から、そのスペースより何倍も大きい謎の生き物が飛び出してきました。そして、ノック音はあっても開かないドアから、黒ずんだ透明の人影もやってきてしまいます。グラブルのクリスマスイブはどうなってしまうのでしょうか。クリスマス・キャロルを読んだ人には、にやりとするシーンがたくさん出てきますよ。